

# 米国の核のデカップリング克服が課題

## 新たな世界秩序と日米関係

### 最終回 迫り来る国家的危機と日本の戦略



拓殖大学海外事情研究所所長

川上高司

現実味帯びてきた米中パワーの拮抗  
勢力均衡が崩壊したとき日本に危機迫る

安倍晋三総理の外交・安全保障のブレンでもあった岡崎久彦元駐タイ大使(故人)は、「日本に危機が迫るのは朝鮮半島における勢力均衡が崩壊した場合である」と警鐘を鳴らしていた。

その場合、大国が介入することになり日本もいやや心なく巻き込まれるが、今の状況が起きようとしている。その根底にはアジアでの米中のパワーの拮抗が次第に現実味を帯び始めていることがある。

米国の国家情報会議(NIC)は、「2040年には中国が米国を抜く」と予測している。さらに、米中逆転の状況を国防大学戦略研究所では、米中は経済的相互依存が深化する一方、軍事的競合関係が高まっている「パワー・パラドックスの時代」とし、米中間に最も紛争が起きやすい時期であると警告する。

そして両者が激突する場所が朝鮮半島および尖閣諸島

体制維持を最優先する北朝鮮  
核武装に対しての抑止強化は必至

米国では長期戦略を立案するネット・アセスメント

その場合、国防総省内部にある。ON Aは1973年のニクソン政権時代に創設され20、30年先の軍事予測を行う。

ヘンリー・キッシンジャー大統領補佐官に抜擢された2014年までON Aの室長を務めていたアンドリュー・マーシャル(95歳)はここでRMA(軍事革命)、ASB(エア・シナリオ)など米軍の中心となる戦略を立案し国家の生存を図ってきた。

島となる。日本は今後、数十年以上にわたり繰り返されるのでこの大國間の力の争いと混乱を具体的にシミュレーションせねばならない。

そこでこの場を借りて15年先の朝鮮半島のネット・アセスメントを簡単に行ってみよう。ここでは北朝鮮は体制維持を最優先し核の放棄はないと考えられる。

そのため、米国が北朝鮮を予防攻撃するかどうかで予測が大きく異なる。最初のシナリオは予防攻撃がなく、核武装した北朝鮮が存続する「現状維持」である。次は「統一朝鮮」誕生のシナリオだがここでは「中国寄りの統一朝鮮」「米国の統一朝鮮」のいずれかである。

この中から日本の安全保障のY市を核報復する。そうなるのは北朝鮮が米国のZ市を核攻撃する。ここに「核武装した北朝鮮」が誕生した場合、第二に「中国寄りの統一朝鮮」および「中立の統一朝鮮」が現れる場合だ。

この中から日本の安全保障のY市を核報復する。そうなるのは北朝鮮が米国のZ市を核攻撃する。ここに「核武装した北朝鮮」が誕生した場合、第二に「中国寄りの統一朝鮮」および「中立の統一朝鮮」が現れる場合だ。第一のケースでは過去ヨーロッパで起きた米中同盟と米国の核のデカップリング現象が起きる。すなわち、もし北朝鮮が日本のX市を核攻撃した場合、米中同盟は崩壊する。当然ながら同じような核の抑止強化が必至となる。

日本にとって好ましい核のない朝鮮半島  
現実には核武装した「反日」の統一朝鮮誕生も

第二のシナリオではハーランド・ドランディングが朝鮮半島を統一されるとなっている。ドランディングがそうなるかである。あるいは、それまでの間に日中間に戦端が開かれ日本が尖閣諸島を死守する予防攻撃が考えられる。前者の場合は米中同盟で朝鮮半島が統一され、日本の安全保障にとりたてて問題はないが、後者の場合は、中国主導で統一される可能性がある。

またソフトランディングでの統一でもやっかいである。その場合、統一朝鮮は核武装をして「反日」となる可能性がある。そして当然のことながら、国連軍の解体、在韓米軍の撤退がみられ、日本にとって最悪のシナリオとなる。

一方、尖閣諸島をめぐる15年先の状況を俯瞰した場

## 防衛戦略を立案し実行を